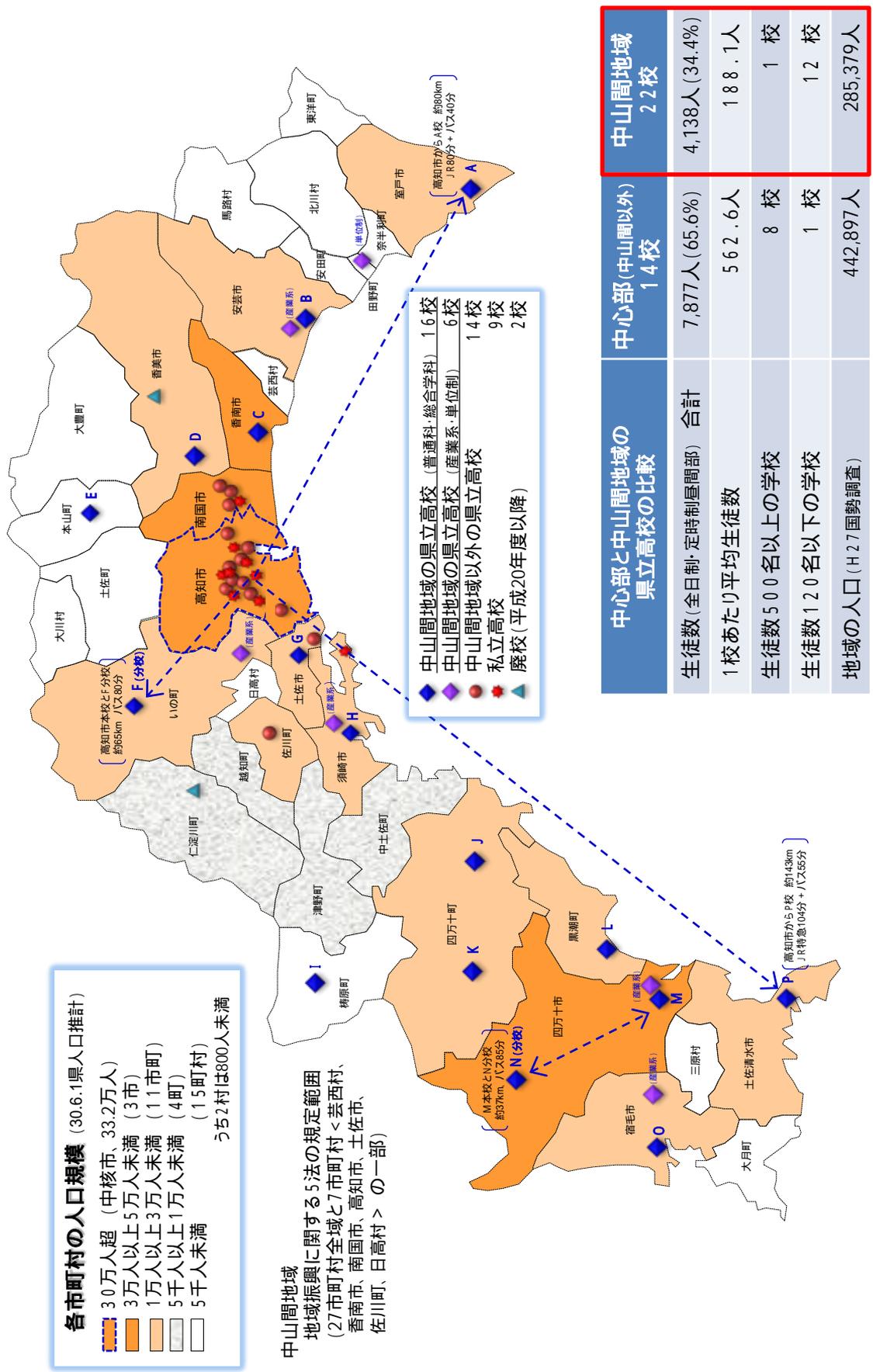


# 高知県の中山間地域における高等学校の現状

本県は県土の93%を中山間地域が占めるが、高知市周辺の7%の中心部に人口の約6割が集中。中山間地域の高等学校は総じて小規模で、東部から西部まで広範囲に点在している状況。



# 中山間地域における高等学校の課題

## 1 大学進学に対応した教育環境の整備（中心部との教育内容の差）

中山間地域の小規模校は、生徒数が少なく教員の配置数が限られる中、就職から進学まで幅広い学力層の生徒に対応できる教育課程の編成が必要であり、中心部の大規模校のように、国公立大学の受験に必要な科目を全て開講することは困難な場合が多い。

### 教育課程の違い

開講が限られる 主な科目	高知市内の 進学拠点校	中山間A校 (進学コース有)	中山間B校 (普通科のみ)	中山間 分校
古典B			-	-
倫理			-	-
数学			-	-
物理			-	-
コミュニケーション 英語			-	-

特に理工学部受験  
に必要な「数」や  
「物理」を開講でき  
ない高校が多い

進学実績も、理系  
より文系が多い

### H29年度(H30.3月)卒業生の進学状況

中山間の 普通科高校	卒業者数	国公立大 進学者	うち 文系	うち 理系
A校	63	4	2	2
B校	25	3	3	0
C校	53	2	1	1
D校	54	4	4	0
E校(分校)	22	0	0	0

## 2 遠距離通学の負担の解消（中山間地域の人口減少にも影響）

15町村には高校がなく、最寄りの高校に通学するための公共交通機関が整っていない地域も多い。国公立大学等への進学を目指し、より良い教育環境を求めて地元を離れ中心部の進学校に通学する生徒も多く、生徒と保護者の負担増に加え、中山間地域の一層の人口減少にもつながっている。

### 高知市内の進学拠点校（H30生徒数797名）の生徒の状況

・高知市から1時間以上の地域からの進学者 100名（12.5%）

#### 【具体的な通学事例】

- ・保護者の送迎やJR等の乗り継ぎにより1時間以上かけて通学
- ・生徒が地元を離れ、高知市内の下宿や親戚宅で生活
- ・子どもの教育のために転勤し、家族で高知市に転居

### 出身中学（JR・車で1時間以上の地域）

出身中学	出身人数	通学手段	通学以外の生徒の状況
安芸市・室戸市	20人	JR	210人
大豊町・本山町・土佐町	13人	バス	30人
仁淀川町・津野町・越知町・須崎市	27人	自家用車	93人
四万十町・中土佐町	13人	下宿	32人
黒潮町・四万十市・土佐清水市・宿毛市	27人	親戚	4人

中山間地域の高等学校における様々な課題を解決するためにも、「遠隔教育」を効果的に活用した教育活動が求められている。

このため、本県では「中山間地域の小規模高校の教育内容の充実」に向けて、平成27年度より『同時双方向型』（いわゆるライブ配信）の遠隔授業を実施。

## H29の実施状況

- ① **高知市内の本校(大規模進学校)と中山間地域の分校** (H27から導入)
  - ・本校は教員のみで単独授業で、分校の国公立大学進学希望者を対象に「政治・経済」(年45回)、「数学探究」(年44回)の2科目を実施
- ② **中山間地域の小規模校間** (H28から導入)
  - ・両校に生徒がいる合同授業で、小規模校での教育課程の充実を目的に「数学演習」(年40回)、「物理基礎」(年15回)の2科目を実施
- ③ **中心部の大規模校と中山間地域の小規模校間** (H29から導入)
  - ・両校に生徒がいる合同授業で、進学希望者向けの受験科目「古典B」(年30回)、基礎学力の定着のための学び直し科目「数学」(年4回)を、それぞれ試行的に実施

## 成果と課題

研究事業開始から3年を経て、遠隔教育に対応した授業展開や指導方法、的確な教材の提示等のノウハウが蓄積され、特に①の単独授業では、生徒・教員ともに「対面授業に等しい授業が実施できている」と好評価。

②・③の合同授業では、グループ活動を取り入れるなど協働的な授業に取り組むことができた。

一方で、当初は生徒側に戸惑いも見られることから、生徒の状況に応じた指導方法や学習評価の手法などについて、さらに工夫・改善を行っていく必要がある。

今後は、進学拠点校等の教員が中山間地域の小規模校に受験科目の授業を配信する手法で、大学受験に対応できる教育環境を整えたいが、実施に向けては事前に配信校と受信校との間で様々な調整が必要であり、導入のハードルが高い。

## 調整課題

### 1. 経験が豊富な教員の確保

・進学指導の経験が豊富であり、遠隔教育を理解し他校生徒の指導・評価を兼務で実施する意欲を持つ教員を、受信校の数に応じて確保することが必要 → **実施科目に対応できる教員の確保が困難**

### 2. 配信校と受信校との教育課程の調整

・上記1の教員が在籍する学校と、受信校との時間割を合わせる必要がある → **年度途中では調整が困難**

### 3. 配信校の教員の指導力向上

・対面授業のように生徒とやりとりできる指導方法の検討や教材の提示など、遠隔教育の特性を踏まえた指導方法を事前に研究し、研鑽を積むことが必要 → **担当教員の多忙化が懸念**

### 4. 受信校の教員等の確保

・生徒の机上巡視等を行う教員、機器操作をサポートする職員が必要 → **小規模校は教員数が限られる**

**例えば5校に3科目を配信する場合、指導経験が豊富で意欲的な教員15名の確保が必要。配信校・受信校のマッチングに困難を極め、調整が整わないことも懸念される。**